切り貼りされる自己語り
――セアラ・ヘイルの自伝的記述における家庭性――

増田　久美子

はじめに

一八七九年、ニューハンプシャー州ニューポートの名士にして郷土史家であったエドマンド・ホイーラーは、故郷の歴史書『ニューポートの歴史』を上梓した。その章のひとつである「文学」には、ニューポート生まれの作家たちの簡潔な評伝が列記されている。書籍の出版はニューポートの歴史を記念するために「住民たちが決議した」事業であったが、ホイーラー自身はかなり早い段階で、自著の「文学」の章にぜひともセアラ・ジョセファ・ヘイルを記載したいと考えていたのだろう。[1] ニューポートのような小さな田舎町にとって、ヘイルは特別な存在であった。彼女は「わが町の作家のなかで一流」であるばかりでなく、「わが国で指折りの女性誌である『レディーズ・ゴーディーズ・ブック』誌の編集者」であり、「わが国のもっとも卓越した女性作家」であったからだ。[2] ホイーラーはヘイルの評伝を執筆するにあたり、彼女本人に下地となる過去の逸話を送るよう依頼した。もちろん、ヘイルは故郷の歴史書のなかに自分が作家として書き込まれることに異論などなかったが、彼女はホイーラーの依頼にたいして次のように返信した。

> ニューポートを去ってから四十年になります――わたくしの愛着のある場所について、あれやこれやと聞き出そうとするのはおやめください。わたくしの記憶のなかにある場所をたどることはできないでしょう。記憶は記憶のまま留めさせてください。〔……〕つまり、親愛なる同郷のあなた（マイ・ディア・タウンズマン）、わたくしは自分の人生や家族の細々としたことに触れてほしいとは思いません。世間の人びと（the public）が知りたがっているのは、わたくしの著述歴にかかわることだけでしょうから、たぶん、あなたの本にはわたくしの

本について紹介するのがいちばんよいでしょう――もし健康の心配がなく、あと五年長生きできるのでしたら、わたくしの著述にかんする略歴（スケッチ）をお送りするのですが、いまのところは時間が少々厳しいのです――。[3]

このときヘイルは八十歳であった。この書簡から一年九か月後、ヘイルはホイーラーに自ら執筆した伝記的スケッチ（つまりは自伝的記述）を歴史書の原稿として送り、そのときの送付状にこう記した。「〔原稿〕には変更や加筆をしないでください。文章が多すぎるようでしたら、もちろん縮約しなくてはなりません。ですが、その場合にはわたくしが短くしますから、原稿を送り返していただきたいのです。あなたはわたくしの子ども時代の描写を依頼なさいましたが、近頃は手すきの時間がないのです」[4]。

ホイーラーとの書簡のやりとりは、じつに九年間におよんだ。そして完成した『ニューポートの歴史』の「文学」の章には、本人による記述とサミュエル・A・アリボーン編集による作家事典（"Allibone's Dictionary of Authors"）からの引用が組み合わされて、「セアラ・ジョセファ・ヘイル」の評伝が構成されたのである。[5] それは故郷の歴史書のためにあらたに書き下ろされた文章というよりも、これまでに何度か公表された自伝的スケッチに、子ども時代の思い出話をつけ足したような文章であった。いうなれば、既存の文章をまるで糊とはさみで切り貼りしたような「自己語り」だったのである。

ヘイルは、当時、多くのアメリカ雑誌が他誌（とくに英国の雑誌）に発表された記事や作品を無断で転載してしまう状況に憤慨していた。ボストンで創刊された女性誌『レディーズ・マガジン』一八二九年一月号の巻頭言に、同誌の編集者であったヘイルはこう述べている。「本誌は寄せ集め（compilation）ではありません。この国に出回っているような、あらゆる古新聞の切り抜きから作られる、たんなる『ごたまぜ』（omnium gatherum）ではないのです。掲載する作品は完全にオリジナルのものです」[6]。これは「切り貼り編集者たち」（scissors editors）への非難であった。[7] 彼女のこのような編集方針は、一八三七年に『レディーズ・マガジン』誌が『ゴーディーズ・レディーズ・ブック』誌に吸収合併されたのち、一八七七年に彼女がその職を辞するまで変わることはなかった。だが、自伝を書くという行為においては、ヘイルはまさしく「切り貼り自伝作家」だったといえる。もちろん、自伝という自己語りがテクストごとに矛盾した内容を書き込んでいるとすれば、それはいずれかのテクストが偽りを伝えていることになる。しかし、ここで考えてみたい問題は次のような点である――複数点在する彼女の自伝的スケッチにおいて、本来ならば他者によって語られるべき伝記的スケッチさえ、なぜヘイルは自ら執筆（もしくは「検閲」）し、そして、その複数のテクストで（書簡をつうじてホイーラーを牽制したように）「わたくしの著述歴にかかわること」だけを繰り返すのか。

ヘイルはアンテベラム期において、初期共和制時代の啓蒙主義的理念とヴィクトリアニズム的な道徳観に立脚した家庭性（domesticity）を提唱した作家である。その著作において「男女の領域分離」（separate spheres）を唱導し、白人中流階級の「感傷的な」女性文化の形成を促進させた保守派として、また、女性が政治領域から切り離されることを企てた反フェミニストとして長らく認識されてきた。だが、彼女の意図する家庭性とは、一般的に認識されている「女性の領域」の教義に反して、女性の公的プレゼンスを可能にさせる思想であったとわたしは考えている。つまり、彼女自身のことばを使えば、家庭性とは「市民社会」（civil society）という公的領域に生きる「女性市民」（citizeness）を現前させる思想および言説だった。[8] ここに、切り貼りされた複数の自伝的記述というテクストを突き合わせてみたい。それは厳選された物語のみを記録し、家庭性レトリックをとおして慎重にセアラ・ヘイルという自画像を作りだした。その自画像がきわめて世間体（リスペクタブルな）のよい女性像でありながら、女性が家庭という私的空間から公的領域へ参入する姿をも正当化するものであったとすると、ヘイルはそのような自画像／女性像を提示することによって、女性が領域の逸脱という禁忌を破ることなく、公的な存在となりうる言説や語彙を読者に教示したと考えられるだろう。

セアラ・ヘイルという女性作家は、今日ではよく知られているとはいいがたい。したがって、本稿ではまずヘイルという人物と作品の評価・解釈の変遷をたどり、そして、彼女の提唱した近代の家庭性や領域のイデオロギーが、現代のアメリカ女性史および女性文学研究ではどのように議論されてきたかを概観する。それらをふまえたうえで、ヘイルの自己語りにおける家庭性とは何かを考えてみたい。それは、ヘイルという自画像に「真の女性らしさ」（True Womanhood）の規範や美徳を遵守させると同時に、じつは公的な主体としても出現させていたのである。

一、（反）フェミニストか帝国主義者か
――セアラ・ヘイルのペルソナ

現在の知名度の低さからは想像もできないが、十九世紀アメリカの文芸・出版界ではセアラ・ヘイルは多大な影響力をもった人物のひとりであった。ボストンの『レディーズ・マガジン』誌においては一八二八年から一八三六年まで、フィラデルフィアで発行された『ゴーディーズ・レディーズ・ブック』誌では一八三七年から一八七七年までのあいだ、それぞれの編集者としてヘイルの仕事はおよそ半世紀におよんだ。とりわけ『ゴーディーズ』誌は、その最盛期であった一八六〇年には十五万人もの定期購読者を誇り、女性読者にとってヘイルと同誌は「客間の規範、キッチンの教科書――各家庭において最後に頼るべき権威」[9]であった。

パトリシア・オッカーによると、当時の女性編集者の多くは女性で

あるというアイデンティティを「自身の権力や権威の根源」として自己定義した。じじつ「権力と権威」は、ヘイルの文芸・出版分野における経歴を表現するには、「まさにふさわしい」用語であったという。[10] ヘイルは雑誌に掲載する記事や寄稿者への報酬額などの決定権を掌握しつつ、毎号欠かさず編集コラムと本の書評を執筆し、折あるごとに自らエッセイや短編物語や詩を寄稿した。また、エドガー・アラン・ポー、ハリエット・ビーチャー・ストウ、オリヴァー・ウェンデル・ホームズ、リディア・シガニーといった作家たちに作品発表の場を提供しつづけ、アメリカ人作家や女性作家の輩出に尽力している。[11] さらには、ヘイルは編集者という権威的な立場から雑誌というメディアを利用して読者に「共感」と「愛国心」を呼びかけ、寄付金を募り、たとえば、ボストンのバンカーヒル記念塔の建設（一八四三年完成）をはじめとするさまざまな慈善・奉仕活動に積極的に関与し、それらを成功に導いた。[12]

ヘイルは雑誌編集のほかにも、作家としての仕事を数多く残している。小説、詩集、エッセイ集、児童書、料理や家事にかんするアドバイスブックに加え、詩のアンソロジーや著名な女性文筆家の書簡集を編纂した。そして、一八五三年に九百頁を超える女性伝記事典『女性の記録』の初版を出版している。[13] 彼女が九十歳で亡くなったとき、フィラデルフィアのある新聞の訃報が伝えたように、まさにヘイルは「尊敬すべき女性作家であり、女性編集者」[14]だった。

ところが、アメリカ文学の「正典」が成立しはじめる二十世紀初頭には、文学や文化における「感傷主義」が蔑視されていく風潮においてヘイルの評価は凋落する。やがては、十九世紀に活躍した多くの女性作家たち（ホーソーンのいわゆる「ものを書き散らす女性たち」）とともに忘れ去られてしまうのだが、一九六〇年代後半から七〇年代の女性史研究のなかで彼女の名は復活することになる――ただし、女性の権利運動を厳しく非難し、女性を公的領域から撤退させ、家庭に拘束させる「男女の領域分離」と家庭性イデオロギーを提唱・強化した「反フェミニスト」として。ヘイルおよび『ゴーディーズ』誌は、バーバラ・ウェルターやアン・ダグラス、スーザン・コンラッドといった家庭性や感傷主義を批判する批評家たちにとって、主たる攻撃対象となった。いまなお、「感傷的・保守的・反フェミニズム的」なヘイル像が（否定的な意味で）広く流通されているとすれば、それはダグラスら一九七〇年代のヘイル批判によるところが大きい。[15]

一九八〇年代になると、アンテベラム期の女性作家によるテクスト研究が本格化し、家庭性や領域イデオロギーについての文化的・政治的意義の再考および再解釈が試みられるようになっていった。というのは、アメリカ女性史の分野では、すでに一九七〇年代のナンシー・コットらの研究により、領域パラダイムを肯定的に解釈する議論が登場していたのである。セアラ・ヘイルの再評価はこの潮流においてはじまった。ニナ・ベイム、バーバラ・バーズとスザンヌ・ゴセット、

スーザン・ライアンらはヘイルの作品を再読し、そこにきわめて「政治的」な（もしくは「政治化された」）家庭性や領域思想を見いだしていくことになる。[16] いっぽう、編集者としてのヘイルの仕事は、ニコル・トンコヴィチやローラ・マコールらによる綿密な研究が提起され、なかでもパトリシア・オッカーは半世紀におよぶヘイルの編集者としてのキャリアを網羅的に分析し、作家・読者・テクストをめぐるヘイルのジェンダー思想が十九世紀アメリカの文学や文化におよぼした影響力をあきらかにした。[17] 一九九〇年代末以降としては、「ポスト領域批評」（キャシー・デイヴィッドソンらの用語）の視点から、エイミー・カプランやアリソン・パイプマイヤーたちによるヘイルの家庭性イデオロギーの解釈が試みられている。ことにカプランの議論は、保守的な家庭性の提唱者として位置づけられていたキャサリン・ビーチャーやヘイルのテクストのなかに家庭性と帝国の密接な共犯関係を見いだし、アンテベラム期の女性作家たちの政治性を浮き彫りにしている。カプランが読み解くヘイルの家庭性は、人種を選別することで国家内部に「（白人）アメリカ人」の（白人）家庭（ホーム）／国家（ネーション）を強化するいっぽう、他方では帝国的主体である女性の活動に支えられて、外部へと伸張するアメリカ国家像を生み出したのであった。[18]

このように、家庭性というイデオロギーと領域批評において、ヘイルにはさまざまなペルソナが与えられてきた――女性を家庭空間へ退行させた反フェミニスト（コンラッド）、「女性の領域」の拡大のため、家庭という私的空間を「政治化した」ポリティカル・ライター（ベイム）、アメリカの文芸・出版界に女性文化を構築した有能な編集者（オッカー）、そして、アフリカへとおよぶ帝国の版図に「ドメスティックな」領域を創造した白人帝国主義者（カプラン）。セアラ・ヘイルを解釈し評価することとは、畢竟するに、まさにアメリカ女性史や女性文学批評における家庭性や領域批評の歴史とパラレルにあることが理解できる。

二、家庭性イデオロギーと「男女の領域分離」論争

家庭性とは、男女の活動を公私で峻別する領域イデオロギーを下支えするものとして、独立革命後の近代アメリカ社会に浸透していった概念である。それは女性を公的な存在として認めず、私的で道徳的で感傷的な存在として彼女らに「真の女性らしさ」や家庭の責務――母ないし妻として、夫や子どもの養育、家事等の家庭管理――を課する規範であった。ところが、家庭性は「家庭的であること」という原義のなかにヴィクトリアニズム特有の道徳観や感傷性を保持しつつも、その含意する内容は言説の使い手ごとに多様であり、往々にして曖昧で矛盾に満ちていた。だが、きわめて特徴的であったのは、家庭性という思想が逆説的にも女性たちに家庭の外での公的活動の機会と、政治的存在としての根拠を与えたという点である。はたして、現代の研究者たちは家庭性をどのように解釈してきたのだろうか。

家庭性という概念が学術的に明瞭化されたのは、一九六〇年代後半の女性史家たちによる論考であった。家庭性はヴィクトリア時代の「真の女性らしさ」を評定するジェンダー規範のひとつであり、「男女の領域分離」イデオロギーが浸透するアンテベラム期において、中流階級の白人女性たちの活動領域を著しく制限していたと強調された。[19] そのため、家庭性は「女性の領域」や「真の女性らしさ」等の言説とともに家庭の閉域性や女性の従属的な地位を意味し、フェミニズムの後退の要因とされてきたのである。ところが、一九七〇年代の女性史研究のなかで注目されたのは、むしろ「女性の領域」が生み出す政治的・文化的な力であり、家庭性にみられる私的・道徳的な価値観が（集団としての）女性の社会的行動をうながしたという領域肯定論であった。

それによると、十九世紀の家庭とはジェンダーによる役割分担が厳密な社会であるがゆえに生じた女性たちの非常に親密な領域であり、女性が拘束されていた場というよりも、自らが積極的に形成した女性固有の文化圏であった。[20] そのような「女性の領域」は（とりわけニューイングランドにおける）白人女性たちの連帯性を育み、女性たち自身による組織化や慈善活動等のさまざまな公的活動へと展開させた場として、のちのフェミニズム運動の「前提条件」であるとさえ評された。[21] 一九七〇年代の女性史研究は、家庭性が「女性にふさわしい場は家庭である」との言説によって十九世紀の女性の生き方を厳しく束縛しながらも、彼女たちに実質的な公的活動の機会や、私的領域から社会・国家へとおよぶ政治的な影響力を獲得させたことを追究したのだった。

その後、「家庭的」な女性の政治的役割について、女性史研究の対象は独立革命期における女性たちの経験にもおよんだ。植民地社会に啓蒙思想が浸透した十八世紀後期、英国製品の不買運動のさいに女性たちは紅茶をボイコットして代用品の利用を呼びかけ、輸入衣類の代替品としてすでに廃れていた糸紡ぎの習慣を復活させてホームスパンの布地を織った。家内での消費や生産といった日常の営みが、女性たちによる愛国的・政治的行為とみなされたのである。[22] また、愛国心を共有する家族という帰属意識は、しだいにアメリカを独立へと導く原動力になると考えられるようになり、独立後、家庭はますます重要な国家基盤として認識され、公徳心あふれる共和国市民が育成される場であると認識された。[23] このとき、子どもたちの養育に従事するよう奨励されたのが女性である。リンダ・カーバーの「共和国の母」という思想が示すように、女性は共和国市民の育成という点で国家建設事業に政治的にかかわることができたと捉えられた。[24]

こうして家庭性や領域パラダイムによる歴史・文化研究が次々に重要な論考を生み出していくなかで、「女性の領域」の拡大がフェミニズム運動と近接していたとの議論や、十九世紀の女性たちが過大に「真の女性らしさ」に固着していたとの認識はいくたびか見直されながら、[25] 領域論に依存してきたことによる重大な問題点を浮上させた。それは、領域の言説が「メタファー」あるいは「修辞」にすぎなかったにもか

かわらず、あたかも十九世紀社会が現実にジェンダーによって分離されていたとの錯覚を生み出してきたこと、そして、領域論による研究対象が主として北部中流階級の白人女性に限定されていたことである。[26]エイミー・カプランは領域批評の実践と家庭性研究の所産について以下のように要約している。

〔「家庭礼讃」あるいは「男女の領域分離」の〕イデオロギーは、家庭のなかに女性の神聖なる場が存在し、女性が道徳的影響力という感傷の力をふるうことのできる場こそ、家庭であると掲げていた。これまで研究者たちは、この家庭性という言葉の多岐にわたる政治的な使用とそのコンテクストを徹底的に追究し、分け隔てられていると考えられてきた男女間の相互浸透的な境界線をつぶさに脱構築してきた。その結果として提示されたのは、社会階級の別なく女性の共感を拡大していくことが、まるで逆に、女性の感傷の力で解消されると謳われた人種間や階級間のヒエラルキー構造を堅持するように働いてしまうということだった。[27]

領域イデオロギーを支える家庭性や「感傷の力」は、白人中流階級の女性のみが専有できる概念かつ権力であった。それは人種や階級の境界線を超越するどころか、むしろ強固にさせてしまったのである。

もちろん、領域論にみる女性たちの階級格差や人種的差異についての異議申し立ては、かなり早い時期に発表されたガーダ・ラーナーの女工労働の歴史研究や、ヘイゼル・カービー、クローディア・テイト、カーラ・ピーターソンたちの黒人女性文学研究によってすでになされてきた。[28]だが、さらなる領域論・家庭性への批判は、キャシー・デイヴィッドソンが「もはや領域批評はやめよう」と声を上げたことによって、より明白となった。デューク大学出版の学術誌『アメリカ文学』一九九八年九月号にて「男女の領域分離」論を再考する特集が組まれたとき、デイヴィッドソンは領域パラダイムによる歴史記述や文学批評を肯定する姿勢について率直な批判を述べたのである。「すばらしき女性の世界をユートピアのごとく提示したところで、十九世紀アメリカの歴史を〔ジェンダー化された領域という〕ふたつの対立項から解釈することは、けっきょくのところ不十分である。それは、十九世紀アメリカの社会や文学がおよぼす多様で複雑な機能を理解するには、あまりにも粗雑な――あまりにも頑なで全体化しすぎる――手段だからである」。[29]さらに、デイヴィッドソンはジェサミン・ハッチャーとともに「反―領域論」ともいえる意図を次のように解説している。

〔……〕われわれが議論しているのは――評価する対象が十九世紀のアメリカ文化であろうと、それを分析する現代の方法であろうと――権力とはどこで終わり、抵抗とはどこで始まるのかを正確に記すことが、たいていの場合は困難であるということだ。どうすれば、われわれは政治的排除の代償として得られた「感傷の力」を評定しはじめることができようか。「感傷の力」は、（あらゆる人種の）女性たちを参政権から排除した、まさにその政治シ

ステムのために得られた力であったが、排除と同時に（たとえば、人種や階級における）特権を示すさまざまな形態にも根ざしている。ポスト領域批評はそのように絡み合う関係に着目し、それがいかに複雑で混乱しており、矛盾すらしているのかを理解させてくれるのだ。[30]

たしかに、家庭性から生ずる「感傷の力」は、家父長的なカテゴリー（男性、政治、市場、「完全なる市民権」、アメリカ正典文学等々）にたいする抵抗の力としてさまざまな政治的行動へと女性たちを導き、また、女性独自の文学や文化を生みだしてきた。だが、それがジェンダーという枠組みではなく、彼女らとは異なる人種・階級・宗教等のカテゴリー（黒人、労働者階級、カトリック教徒等々）に向けられたとき、その力は翻って家父長的なものとの共犯関係を結ぶことによって、異質なものを排除する権力としても機能したのである。つまり、十九世紀アメリカ文化や社会をたんなる男女の領域の二項対立としてみるだけでは意味がない。権力構造を内在させる家庭性にはジェンダーの問題だけではない種々の要素が入り組み、それが錯綜する関係性のなかにこそ、十九世紀アメリカの文化のかたちを理解する視座があるということだ。つまり、デイヴィッドソンとハッチャーが呼びかけた「反―領域論」とは、そのような視座から取り組まれた一連の論考を評価することによって、十九世紀アメリカのジェンダー諸相の本質に迫りうる契機としてとらえることができる。[31]

だが、そのように領域論が否定されるなかで、家庭という私的空間にて培われていく女性の能力や権威が家庭的な母親という役目にとどまらず、その立場を利用して女性の活動領域を家庭外へと拡大させた意義については、問い続けていくべきであろう。アンテベラム期の女性たちが、当時最大の政治的争点であった奴隷制問題のみならず、貧困者の救済、節酒の励行、犯罪者の更生といった種々の慈善活動や社会改良運動にかかわるようになったのはなぜなのか。それらの行為は、家庭の延長線上に中流階級家庭の道徳的価値観をさまざまな社会問題に結びつけ、道徳的責務を担う母親としての立場を担保する取り組みであった。こうした社会的活動は、多くの女性たちが「第二次大覚醒」として知られる福音主義的信仰の復興運動に参加したことに起因するが、このときに獲得された女性たちの組織化と実務的な行動の経験は、家庭性という概念なしに実現することはできなかった。家庭性は、女性の「優れている」とされた道徳的影響力を振るうという身ぶりにおいて、彼女らに公的な行為を正当化する「合理的説明」として機能したのである。[32]

すると、「男女の領域分離」イデオロギーが強化されていく時代において、女性たちが家庭性を利器に社会改良等の公的活動を展開した意義について、次のように集約することができるだろう。彼女たちは家庭という私的領域と政治（への直接的参加）という公的領域のあいだに、もうひとつの公的空間を構築した。それは「女性の領域」の内実

が変容・拡大し、あらたな意味づけのされた「市民社会」であった。女性たちは、家庭性に裏打ちされた母親的・道徳的影響力、あるいはその影響力を凌ぐ事実上の行使力や権力によって社会の公私領域の境界を解体し、男性とは差異化された女性市民として女性の公的活動を可能にしたのである。このように法的・政治的権利をもたずに女性の市民的行為が示されたことは、アンテベラム期アメリカの政治状況においてきわめて重要な出来事であった。[33] この市民性が社会における女性の新しい役割を保証するものであったとすれば、セアラ・ヘイルのような反フェミニスト（とみなされてきた人物）が女性の権利を否定し、家庭性を提唱しなければならなかったのは、彼女の仕事の本義がそのような女性の自画像――子どもを共和国市民に育て上げる母親というよりも、じつは自分自身こそがアメリカ市民であろうとする女性像――を読者に示すためだったといえるだろう。

このように「男女の領域分離」論争の展開を眺めてみると、「女性の領域」を支える家庭性とは、それ自体が矛盾した概念であったことがわかる。女性を私的領域に定位させる「女性と家庭」という関係性は、建国期には「共和国の母」という「政治的」役割のために国家建設の土台のうえに築かれ、アンテベラム期には実質的な社会活動の手段として公的領域へと開かれていった。家庭性とは、女性を家庭にとどめおくことを奨励しながら、そのじつ女性自らが公私を分け隔てる境界を切り崩し、家庭という私的領域をより大きな公的社会のなかに拡大させていく特徴において、きわめて越境的流動性をもったイデオロギーだったのである。

三、切り貼りされる自伝的スケッチ

本稿では、ヘイルが一八七九年に亡くなるまでに発表された自伝的スケッチを、本人が確実に「検閲」したと思われる伝記的記述も含めて五点とする。最初のスケッチは、一八三七年に刊行された英米の女性詩人たちの詩選集『レディーズ・リース』に所収されている。このアンソロジーを編集したのはヘイルであるが、彼女は詩人たちの作品および評伝とならんで自分の詩と自伝的記述を掲載した。[34] 第二のスケッチは、一八五〇年十二月号『ゴーディーズ』誌上にて紹介された略伝である。創刊二十周年を記念する特別号として、経営者であったルイス・A・ゴーディーがヘイルの経歴と肖像画を紹介した。[35] 第三のスケッチは、ヘイル編集による女性伝記事典『女性の記録』（一八五三年初版）である。ここに所収された「ヘイル、セアラ・ジョセファ」の項目には、ゴーディーが自誌に寄せた第二のスケッチからほぼ全文が引用され、その引用に本人による記述が組み合わされている。[36] 第四のスケッチは、本稿の冒頭で述べたエドマンド・ホイーラーの『ニューポートの歴史』に寄稿した略伝である。そして、最後が『ゴーディーズ』誌を退職するさいに書かれた別れのことば（“Fifty Years of My Literary Life”）である。ヘイルは最後の編集コラムとなる一八七

七年十二月号に自分の経歴を執筆した。[37]

かつてヘイルは読者たちに女性作家の伝記を読む重要性について、次のように伝えたことがあった。「すぐれた人物たちの私的な経歴を夢中になって読もうとすることが、つねに求められています。伝記文学へのこのような情熱が正しく育まれ、方向づけられるのであれば、女性が知的にも道徳的にも向上するうえで非常に力強い影響力をおよぼすことでしょう」〔強調引用者〕[38]。だが、後世の伝記作家によると、ヘイル本人はけっして自身の私生活を詳細に語ることがなかった。[39] じじつ、いずれのスケッチにおいても作家・編集者としての自己の形成過程だけが扱われ、そこに共通して語られているのは次の点に絞られる。(1)ヘイルの文学にたいする嗜好が母親の教えによるものであること、(2)少女時代の読書体験、(3)兄と夫による学問的指導が作家としての素地を作ったこと、(4)夫の死去により五人の子どもをもつ未亡人となったこと、そして、(5)子どもたちの養育のために編集の仕事を引き受け、ボストン行きを決意したことである。ニコル・トンコヴィチは、どのテクストも家庭婦人であったヘイルが文芸・出版界という公的領域へ進むことになった「出来事（イベント）を記念化し〔……〕その物語を繰り返す」ことによって、編集者としての公的なセアラ・ヘイル像を作りあげ、また、その自画像が『ゴーディーズ』誌によって生み出される理想的な女性像を「具現化」していると指摘する。[40] つまり、そのようにして作られたヘイル像は公的な編集者かつ私的な「真の女性らしさ」の体現者であり、まさに公的な存在であると同時に私的な存在でもあるということだ。シドニー・スミスとジュリア・ワトソンが定義するように、十九世紀に書かれた女性の自伝というテクストは他者と共有するために「表象」された「自己語り（ライフ・ストーリー）」である。[41] とすれば、ヘイルの自伝的スケッチは女性読者にどんな物語を伝えようとしたのか。おそらく、ヘイルは女性が家庭性の言説を正しく使うことによって、私的な存在であることの規範――「女性の領域」や「真の女性らしさ」などの教義――から逸脱することなく、公的な存在として生きることの模範を提示したのであろう。しかも、四十年間にわたる自伝的記述を眺めてみると、切り貼りされたスケッチのテクストからしだいに（男女の知的平等を掲げる）啓蒙主義思想の影響が後退し、（男女の差異を強調する）家庭的・道徳的な価値観が前景化していくことがわかる。まずは最初の自伝的スケッチ（一八三七年）からヘイルの「自己語り」を追ってみたい。

セアラ・ジョセファ・ビュエルは、一七八八年にニューハンプシャー州ニューポートで生まれた。父はアメリカ独立革命に従軍した経験をもつ農夫で、母は「共和国の母」を体現するような教育熱心な女性であった。[42] 当時のほとんどの女子がそうだったように、ヘイルは正規の教育を受けることはなかったが、「石清水のように明晰な知性と、知識を人に伝えるすばらしい才能」をもった母親の教えにより、早熟な読書家となる。子どもの頃に読んだ本は、「聖書と『天路歴程』のほか

に、〔……〕ミルトン、ジョンソン、ポウプ、クーパー、そして、シェイクスピアを何冊か」だった（*The Ladies' Wreath* 384）。最大の愛読書は七歳の頃に読んだアン・ラドクリフの『ユドルフォ城の怪奇』（*The Mysteries of Udolpho*, 1794）である。「わたしが知っていた本のなかで、アメリカ人によって書かれたものはほとんどありませんでしたし、女性によるものは一冊もありませんでした。でも、ここに作品があったのです。これまでの読書体験のなかで〔……〕もっとも夢中になった本が女性によって書かれていたのです。どんなにうれしかったことでしょう！――女性と自分の国の評価を高めたいという願いは、記憶するなかでわたしが最初に抱いた思いでした」（*The Ladies' Wreath* 384-385）〔強調原文〕。数少ない幼少期の挿話を語るテクストで特徴的なのは、父親の存在が消し除かれていることと、母親の明晰さが（知性に性差はないとする）啓蒙主義的な言説によって示されることである。[43] また、幼い少女が女性作家を発見したときの無邪気な喜びは、女性がゴシック小説を読むことの「不適切さ」を相殺させているかのようにも思える。

さらに、ヘイルはダートマス大学の学生だった兄からラテン語や哲学を学び（*The Ladies' Wreath* 385）、結婚後は毎夜二時間におよぶ夫との勉強会で「フランス語、植物学、〔……〕鉱物学、地質学」の知識を獲得した。弁護士であった夫の指導による「ためになる読書」は「わたしの理性を啓発し、判断力を強化し、自分の知力に自信を与えてくれた」という（*The Ladies' Wreath* 386-387）。そして、夫の死去によって五人の子どもが残されたとき、ヘイルは次のように決意した。

どうやって子どもたちを扶養し、教育すればよかったのでしょうか。〔……〕わたしは巨万の富など一度も切望したことはありません――ですが、教育という利益を奪うことは子どもたちを「本当に貧しく」してしまうことです。そのことについて深く考え、ついにこう決めたのです。わたし自らが子どもたちの教育のために生計を立てよう、と。彼らの父親はそうしたはずなのですから。わたしはすべての俗世の苦労をその目的のために捧げることにし、どんな障害があろうと、神の摂理を信頼し、前へ進んでいこうとしたのです。（*The Ladies' Wreath* 387）

語り手は、子どもの教育を重視する「共和国の母」の教えを成就すべく、母親が父親に代わって金銭を稼ぐという「俗世の苦労」を「神の摂理」のもとに正当化する。十九世紀アメリカでは、女性が唯一の子どもの保護者となった場合、キリスト教信仰をとおして公然と「作家として生計を立てる」と申し開きすることは、「世間体にかなっている」とみなされた。[44] また、ニナ・ベイムが解説するように、女性作家たちは自身の作品が「真の女性らしさ」の価値基準――「文体は婉曲かつ上品で繊細、物語のテーマ選びは家庭的・社会的・私的であること、物語の調子は貞淑で品があり、道徳的で教訓的であること」――に適合するかぎり、批判されることはなかった。[45] そして、ヘイルは文

筆業が自分にとって「最大の資源」であると信じ、詩集および二巻本の小説『ノースウッド』（一八二七年）を出版、その翌年に『レディーズ・マガジン』誌の編集者としてボストンへ招かれたことを語る。「雑誌は成功するのだろうかと、かなり不安になりましたが、〔……〕わたしは〔その招きを〕受け入れたのです」（*The Ladies' Wreath* 388）。現実にはニューポートのような小さな田舎町では、子どもたちを離散させて親類に預け、末息子だけを連れてボストンで就労するという事態は「スキャンダル」[46]であった――当然、その「スキャンダル」はテクストには表出されてはいないが。

ヘイルは、当時の学問・文壇が男性の領分であることを強く自覚するようになっていく。第一スケッチからおよそ十五年後の第三スケッチ（一八五三年出版の『女性の記録』）では、母親の頭脳の明晰さを語る表現が消え、夫から学んだ学問分野の名称（「フランス語、植物学、〔……〕鉱物学、地質学」）が消える。そのように啓蒙主義的な知の表現が後退していくのは、女性が知的であることを誇示せず、男性の学問領域へ侵犯しないとする語り手の態度を表明しているのだろう。その啓蒙主義思想に代わって顕著になっていくのが、女性の家庭性や道徳性を重視する価値観である。女性作家ラドクリフを発見したときの喜び（「どんなにうれしかったことでしょう！」）のあと、以下の文章が加筆されている。

女性の評価を高めたい、国のために何かをしたいという願いは、記憶するなかでわたしが最初に抱いた思いでした。こうした感情によってわたしは健全な影響を受け、明確な目標を方向づけることができたのです。わたしの文学への探求は、いかなる種類の利己主義をも超えた目的がありました。女性に与える女性の精神的影響力は、わたしの場合たいへん重要だったため、この最新作である『女性の記録』やそのほかの著作に着手したのです。わたしはこれが家庭での教育（home education）の補助になってほしいと考えています。ここに描かれた女性たちの模範となる生き方は、社会の道徳的向上のための着想の源泉となり、力となることでしょう。（*Woman's Record* 687）

ヘイルは、自分のスケッチが含まれた『女性の記録』を読む読者が若い女性であるだけでなく、この高価な伝記事典を購入する人物が男性（父親や夫）であることも意識していたと思われる。なぜなら、女性読者にはこのテクストを「家庭」で学習するように諭すとともに、男性（読者）にたいしては別のことを進言しているようにもみえるからだ――社会の道徳性を高めることは女性の義務である。そのためには適切な女子教育が必要であるが、家庭という私的空間での教育はあくまでも私的な行為であって、けっして男性の領分を侵害するものではない、というように。

『女性の記録』からさらに四半世紀ほどが経ち、ヘイルが八十九歳のときに発表された最後の自伝的スケッチは、『ゴーディーズ』誌での最

後の編集コラムとして書かれた。このテクストでは、もはや明晰な母親からの教えや（兄や夫による）学問的知識の獲得という語りさえいっさい省かれ、「一八二七年に監督教会のジョン・L・ブレイク牧師から一通の手紙を受け取った」ことからはじまる（“Fifty Years”522）。『レディーズ・マガジン』誌の編集の仕事が「牧師」からの招聘であると述べることによって、ボストンでの文筆業がますます「神意」によるものだと強調されていよう。さらに、故郷ニューポートを離れるときの描写が続く。

わたしは夫が残してくれた大切な家でひっそりと暮らしていました。〔……〕このかけがえのない家庭を断念し、しばしのあいだ、ひとりをのぞいて子どもたちと離ればなれとなり、そして、わたしがひどく恐れていた世界へと向かっていったのです。（“Fifty Years”522）

ヘイルが足を踏み入れるのを「ひどく恐れていた世界」、すなわち、文芸・出版界という公的領域へ参入することは、やはりここでも「神の意志によって指名された、あらたな義務と責任」として是認されている（“Fifty Years”522）。だが、これまでのスケッチと異なるのは、ヘイルが「家庭を断念」して「子どもたちと離ればなれ」となった事実を隠蔽することなく、公的領域へ「向かっていった」ことを断言している点である。じつはこの最後のスケッチのみ、ほぼ「切り貼り」の痕跡のない記述となっているのだが、おそらく、ここでは自伝的要素を最小限にとどめ、ヘイルが「社会の道徳的向上」のために成し遂げた公的活動の数々を中心に過去をふり返っているからであろう。つまり、二段組み三ページにわたって執筆された最後の編集コラムには、「女子教育」「バンカーヒル記念塔」「女性医療使節団」等の項目がそれぞれ立てられ、市民社会でそれらの活動に尽力してきたヘイルの姿がひとりのアメリカ女性市民として凝縮されているのである。ヘイルは、女性読者に向けて次のように述べている。「アメリカ女性（マイ・カントリー・ウーマン）であるみなさんにお別れを申し上げなければなりません。半世紀におよぶこの仕事が、神に指名された領域にて女性たちのさらなる幸福と有能な生き方の恩恵になることを願っています。女性たちの前にはより高くすばらしい仕事へのあらたなる道が開かれています。それは五十年前では未知なるものでした。女性たちにはそうした機会を向上させ、自分たちの誇り高き職分に誠実に心を傾けていってほしいのです。それが、わたしの偽りのない祈りです」（“Fifty Years”523）。これが若い女性たちに向けて、老齢となった女性作家・編集者が語る家庭性の最後の言説であった。市民社会にたいする道徳的な女性の責務とは、女性が「誇り高き職分」をはたすことである。それは家庭という「神に指名された領域」を充実させることに等しく、神への信仰のもとに公的な社会行為として正当化され、しかも、もはや「未知なるもの」ではなく、女性の公的な存在を現前させるのである。

おわりに

女性による自伝とは、ふたたびシドニー・スミスとジュリア・ワトソンの定義を拝借すれば、そこに描かれた「経験」と「記憶」が「すでに解釈された事象であるゆえ、少なくとも一度は純然たる事実から剥ぎ取られた〔……〕歴史的事実と虚構（フィクション）が織り交ぜられた物語」である。そのため、自伝を読む読者は「ありのままに記憶された人生についての事実」を知るのではなく、「書き手が自分の人生を表象し、そこから引き出された複数の意味」によって「真実」をとらえようとする。[47] その意味において、セアラ・ヘイルの切り貼りされた自己語りは限りなく小説（フィクション）に等しい。はたして、彼女の読者たちがそこからどんな「真実」を読み取ったのか。それは定かではないが、ヘイル本人は自分の読者のなかから「女性市民」が誕生することを期待していたにちがいない。

さて、ヘイルは一八七〇年にエドマンド・ホイーラーが編纂する『ニューポートの歴史』のための切り貼り原稿を送ったものの、実際の出版までにはかなりの年月がかかった。ホイーラーへの最後の手紙となる書面の結びには、こう記されている。「わたしの『別れのことば』の写しを二部同封します。ひとつはあなたに、もうひとつは奥様に」。[48] ホイーラー夫妻は、『ゴーディーズ』誌に掲載された切り貼り原稿とは異なるヘイル最後の自己語りをどのように読み、ここから何らかの「真実」をとらえたのだろうか。やはりそれも定かではない。セアラ・ヘイルは『ニューポートの歴史』がようやく出版された一八七九年に、その長い生涯を終えた。

注

（1）Edmund Wheeler, *The History of Newport, New Hampshire, from 1766 to 1878, with a Genealogical Register* (Concord, New Hampshire: The Republican Press Association, 1879), 3. ニューポートの住民たちによる郷土史編纂の「決議」は一八七〇年であったが、ホイーラーはヘイルとの書簡のやりとりを少なくとも一八六九年から開始している。Letters from Sarah Josepha Hale to Edmund Wheeler, March 1869 - February 1878, Richards Free Library, Newport, New Hampshire.

（2）*Ibid*, 125.

（3）Sarah J. Hale to Edmund Wheeler, March 26, 1869, Richards Free Library.

（4）Sarah J. Hale to Edmund Wheeler, December 21, 1870, Richards Free Library.

（5）Wheeler, 125-131.

（6）Sarah Josepha Hale, "The Beginning," *Ladies' Magazine*, 2 (January 1829): 5.

（7）「切り貼り編集者たち」という表現は、パトリシア・オッカーによる用語。Patricia Okker, *Our Sister Editors: Sarah J. Hale and the Tradition of Nineteenth-Century American Women Editors* (Athens: The University of Georgia Press, 1995), 87.

（8）ヘイルの「市民社会」および「女性市民」への言及について、次の記事を参照のこと。Sarah Josepha Hale, "The 'Conversazione.'" *The Lady's Book*, 14 (January 1837): 5; "Editors' Table," *Godey's Lady's Book and Magazine*, 74 (June 1867): 557.

(9) Ruth E. Finley, *The Lady of Godey's: Sarah Josepha Hale* (Philadelphia: J. B. Lippincott Co., 1931), 22.『ゴーディーズ』誌の発行部数は同誌による公称数字である。Frank Luther Mott, *A History of American Magazines, 1741-1850*, Volume I (Cambridge: Harvard University Press, 1966), 581.

(10) Okker, 1.

(11) Okker, 1-2; Alison Piepmeier, *Out in Public: Configurations of Women's Bodies in Nineteenth-Century America* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2004), 186-187.

(12) バンカーヒル記念塔の建設のほかに、ボストン船員支援協会の設立（一八三三年）、マウント・ヴァーノンの保存運動（一八六〇年）、女子大学として開学されたヴァッサーカレッジ創立への貢献（一八六一年）、国民的祝日としての「感謝祭」の推進（一八六三年制定）などがあげられる。いずれの活動も、女性（読者）の共感・道徳心・愛国心を喚起させて展開したといわれている。Isabelle Webb Entrikin, *Sarah Josepha Hale and Godey's Lady's Book* (Philadelphia: Lancaster Press, 1946), 30-32, 39-41, 123-125; Sherbrooke Rogers, *Sarah Josepha Hale: A New England Pioneer, 1788-1900* (Grantham: Tompson and Rutter, 1985), 46-58, 88-111.

(13) ヘイルの詳細な著作一覧については、（不明確な点はあるものの）イザベル・エントリキンによって作成されたリストを参照されたい。また、『女性の記録』はヘイルの著作においてもっとも重要な作品である。ヘイルはここにエントリーされる人物を増補しながら最終的に第三版（一八七六年）まで刊行し、厖大で野心的な女性伝記事典を完成させた。Entrikin, 137-153; Sarah Josepha Hale, *Woman's Record; or, Sketches of All Distinguished Women, from the Creation to A. D. 1854, Arranged in Four Eras* (New York: Harper & Brothers, 1853).

(14) Quoted from Okker, 1.

(15) Barbara Welter, "The Cult of True Womanhood," *American Quarterly*, 18 (1966): 151-74; Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (1977; New York: The Noonday Press, 1998) 45-48; Susan Phinney Conrad, *Perish the Thought: Intellectual Women in Romantic America, 1830-1860* (New York: Oxford University Press, 1976), 38-44. ヘイルの再評価以降、現在ではむしろヘイルは女性の地位向上に献身した「フェミニスト」として認識されることが多い。しかし、バーズとゴセットは、ヘイルの思想について「フェミニストや反フェミニスト〔といった問題〕よりも、もっと政治的な意味合いのある文脈において把握されなければならない」との注意をうながしている。Barbara A. Bardes and Suzanne Gossett, "Sarah J. Hale, Selective Promoter of Her Sex," Susan Albertine (ed.), *A Living of Words: American Women in Print Culture* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1995), 21.

(16) Nina Baym, "Sarah Hale, Political Writer," *Feminism and American Literary History* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1992), 167-182; Barbara Bardes and Suzanne Gossett, *Declarations of Independence: Women and Political Power in Nineteenth Century American Fiction* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1990); Susan M. Ryan, "Errand into Africa: Colonization and Nation Building in Sarah J. Hale's *Liberia*," *The New England Quarterly*, 68.4 (December 1995): 558-583.

(17) Laura McCall, " 'The Reign of Brute Force Is Now Over': A Content Analysis of *Godey's Lady's Book*, 1830-1860," *Journal of the Early Republic*, 9 (1989): 217-236; Nicole Tonkovich, *Domesticity with a Difference: The Nonfiction of Catharine Beecher, Sarah J. Hale, Fanny Fern and Margaret Fuller* (Jackson: University Press of Mississippi, 1997); Okker, *Our Sister Editors*.

(18) Amy Kaplan, "Manifest Domesticity," *American Literature*, 70.3 (September 1998): 444-463; Piepmeier, 172-208.

(19) Welter, 151, 162; Aileen S. Kraditor, *Up from the Pedestal: Selected Writings in the History of American Feminism* (Chicago: Quadrangle Books, 1968), 9-13.

(20) Carroll Smith-Rosenberg, "The Female World of Love and Ritual:

Relations between Women in Nineteenth-Century America," *Signs*, 1.1 (1975): 1-29.

(21) Nancy F. Cott, *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835*, Second Edition (1977; New Haven: Yale University Press, 1997), 201. そのほかの一九七〇年代における重要な家庭性研究として、キャサリン・スクラーは、十九世紀の女子教育に尽力したキャサリン・ビーチャー（当時、ペイルとならんで家庭性を提唱する重要な論客であった）にみる家庭性が、民主主義国家の発展において個人の育成と「文化の統一化と女性のヘゲモニー」を促進させる手段であったという解釈を提示した。Kathryn Kish Sklar, *Catharine Beecher: A Study in American Domesticity* (New Haven: Yale University Press, 1973), xiii.

(22) Mary Beth Norton, *Liberty's Daughters: The Revolutionary Experience of American Women, 1750-1800*, Cornell Paperback Edition (1980; Ithaca: Cornell University Press, 1996), 156-163, 166-169.

(23) Clifford Edward Clark, Jr., *The American Family Home, 1800-1960* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1986), 9-11; Glenna Matthews, *"Just a Housewife": The Rise and Fall of Domesticity in America* (New York: Oxford University Press, 1987), 6-9.

(24) しかし、カーバーが述べるように、「共和国の母」は女性の「最低限の政治的知識と関心」を正当化したにすぎないため、この思想は女性の直接的政治参加を否定したものであるといえる。Linda K. Kerber, *Women of the Republic: Intellect and Ideology in Revolutionary America* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1980), 285; Jan Lewis, "The Republican Wife: Virtue and Seduction in the Early Republic," *The William and Mary Quarterly*, 44.4 (October 1987): 689-721.

(25) Barbara Leslie Epstein, *The Politics of Domesticity: Women, Evangelism and Temperance in Nineteenth-Century America* (Middletown: Wesleyan University Press, 1981), 8-9; Frances B. Cogan, *All-American Girl: The Ideal of Real Womanhood in Mid-Nineteenth-Century America* (Athens: The University of Georgia Press, 1989). フランシス・コーガンはバーバラ・ウェルターの「真の女性らしさ」に代わり、「本当の女性らしさ」(Real Womanhood) という「健康的で教育のある、自立した女性像」を提示した。

(26) Linda K. Kerber, "Separate Spheres, Female Worlds, Woman's Place: The Rhetoric of Women's History," *Toward an Intellectual History of Women* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1997), 159-199.

(27) Amy Kaplan, *The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture* (Cambridge: Harvard University Press, 2002), 24.

(28) Gerda Learner, "The Lady and the Mill Girl: Changes in the Status of Women in the Age of Jackson," *Midcontinent American Studies Journal*, 10.1 (1969): 5-15; Hazel Carby, *Reconstructing Womanhood: The Emergence of the Afro-American Woman Novelist* (New York: Oxford University Press, 1987); Claudia Tate, *Domestic Allegories of Political Desire: The Black Heroin's Text at the Turn of the Century* (New York: Oxford University Press, 1992); Carla L. Peterson, "*Doers of the Word": African-American Women Speakers and Writers in the North (1830-1880)* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1995).

(29) Cathy N. Davidson, "Preface: No More Separate Spheres!," *American Literature*, 70.3 (1998): 445.

(30) Cathy N. Davidson and Jessamyn Hatcher, "Introduction," Davidson and Hatcher (eds.), *No More Separate Spheres!* (Durham: Duke University Press, 2002), 14.

(31) デイヴィッドソンがポスト領域批評の先駆的研究として高く評価する論考のひとつに、ローラ・ロメロの家庭性研究がある。ロメロは、アンテベラム期の社会や文化がジェンダーによって分断されているとの見方を否定し、白人中流階級家庭のみならず、さまざまな場（フロンティア空間、黒人の権利運動、「男の絆」で結ばれた上位文化など）において家庭性が権力と抵抗のせめぎ合いを表象していることを分析した。Lora Romero, *Home Fronts: Domesticity and Its Critics in the Antebellum*

United States (Durham: Duke University Press, 1997).

(32) Lori D. Ginzberg, *Women in Antebellum Reform* (Wheeling, Illinois: Harlan Davidson, 2000), 5-8; Kathleen D. McCarthy, *American Creed: Philanthropy and the Rise of Civil Society, 1700-1865* (Chicago: The University of Chicago Press, 2003), 49-52; Matthews, 62-65.

(33) 女性と市民社会の関係性について本稿が依拠するのは、以下の論考によるところが大きい。Mary Kelley, *Learning to Stand and Speak: Women, Education, and Public Life in America's Republic* (Chapel Hill: The North Carolina Press, 2006), 1-15; Mary P. Ryan, "Gender and Public Access: Women's Politics in Nineteenth-Century America," Craig Calhoun (ed.), *Habermas and the Public Sphere* (Cambridge: The MIT Press, 1992), 259-288; Amy A. Easton-Flake, "An Alternative Woman's Movement: Antisuffrage Fiction, 1839-1920," Brandeis University, PhD dissertation (2011), 9-12, 25; Paula Baker, "The Domestication of Politics: Women and American Political Society, 1780-1920," *The American Historical Review*, 89.3 (1984): 620-621.

(34) Sarah Josepha Hale, *The Ladies' Wreath: A Selection from the Female Poetic Writers of England and America* (Boston: Marsh, Capen and Lyon, 1837), 383-388. ニナ・ベイムによると、当時の新聞や雑誌の評者が女性作家の伝記的な情報を掲載することはめずらしくなかったが、男性作家の伝記的背景が求められることはなかったという。Nina Baym, *Novels, Readers, and Reviewers: Responses to Fiction in Antebellum America* (Ithaca: Cornell University Press, 1984), 254.

(35) L. A. G. (Louis Antoine Godey), "Sarah Josepha Hale," *Godey's Lady's Book*, 41 (December 1850): 326

(36) Hale, *Woman's Record*, 686-691.

(37) Sarah Josepha Hale, "Editors' Table: Fifty Years of My Literary Life," *Godey's Lady's Book*, 95 (December 1877), 522-524. 出版年をみると、『ニューポートの歴史』に所収された自伝的記述が最後のスケッチとなるが、ホイーラーとの書簡であきらかなように、すでにこの歴史書のためには一八七〇年に原稿が書き送られているので、『ゴーディーズ』誌最後の編集コラムを最後のスケッチとした。

(38) Sarah Josepha Hale, "Eminent Female Writers," *Ladies' Magazine*, 2 (September 1829): 393.

(39) Ernest L. Scott, Jr., "Sarah Josepha Hale's New Hampshire Years, 1788-1828," *Historical New Hampshire*, 49.2 (1994): 73.

(40) Nicole Tonkovich, "Rhetorical Power in the Victorian Parlor: *Godey's Lady's Book* and the Gendering of Nineteenth-Century Rhetoric," Gregory Clark and S. Michael Halloran (eds.), *Oratorical Culture in Nineteenth-Century America: Transformations in the Theory and Practice of Rhetoric* (Carbondale: Southern Illinois University Press, 1993), 163-164.

(41) Sidonie Smith and Julia Watson, "Introduction: Living in Public," *Before They Could Vote: American Autobiographical Writing, 1819-1919* (Madison: The University of Wisconsin Press, 2006), 4.

(42) Geraldine K. Ellis, "Sarah Josepha Hale, Mr. Godey's Lady," unpublished manuscript, Richards Free Library, Newport, 2, 32. 興味深いことに、ヘイルの自伝的テクストには父親にかんする記述がいっさい登場しない。本人のテクストに書かれていない伝記的背景は、エントリキン、エリス、ロジャーズ、スコットらのヘイル伝を参照にしている。

(43) 「父の不在」にかんして付言すれば、ヘイルが自伝に父親ゴードン・ビュエルについて一言も言及しないのは、彼がアメリカ独立戦争に従軍した「英雄」でありながら、戦時による負傷で生涯脆弱な身となったからだろうか。ゴードンはそのような身体的理由で農夫をやめ、一八一〇年に宿屋を営むことになった。また、ヘイルは「わたくしの著述歴にかかわること」にこだわるものの、ニューポート時代に活動していた地元の文芸クラブ（the Coterie）についてまったく触れたことがない。この文芸クラブの活動は、詩や散文や戯曲を議論・朗読しあい、芝居をし、さらに自作品を持ちよって批評しあい、機会があれば雑誌に投稿するといった内容であった。ヘイルにとって、のちの文筆業にかかわる活動だったと考えられるが、おそらく問題は、文芸クラブの仲間たちが「男女混淆」だった点であろう。十九世紀に男女からなる聴衆にたいして女

性が演説行為等をすることの禁忌については、スーザン・ザエスクを参照のこと。Scott, 66, 82; Ellis, 53; Rogers, 17-18; Jane E. Delaurier, "The Radical Frances Wright and Antebellum Evangelical Reviewers: Self-Silencing in the Works of Sarah Josepha Hale, Lydia Maria Child, and Eliza Cabot Follen," University of Missouri-Kansas City, Ph.D dissertation, (2015): 181-182; Susan Zaeske, "The 'Promiscuous Audience' Controversy and the Emergence of the Early Woman's Rights Movement," *Quarterly Journal of Speech*, 81 (1995): 191-207.

(44) Lawrence Buell, *New England Literacy Culture: From Revolution through Renaissance* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988), 414n8; Ellis, 90.

(45) Baym, *Novels, Readers, and Reviewers*, 257; Susan Coultrap-McQuin, *Doing Literary Business: American Women Writers in the Nineteenth-Century* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1990), 16.

(46) Ellis, 128-129.

(47) Smith and Watson, 4-5.

(48) Sarah J. Hale to Edmund Wheeler, February 20, 1878, Richards Free Library.

Scissors Autobiographer : Domesticity in Sarah Hale's Autobiographical Sketches

Kumiko MASUDA

Sarah Josepha Hale (1788-1879) was one of the foremost women engaged in literary print culture in the middle of nineteenth-century America. As a writer, she published novels, poetry, books on cooking and housekeeping, children's books, anthologies, and an ambitious nine-hundred-page encyclopedia of prominent women in history. As an editor of *Godey's Lady's Book*, the most widely circulated woman's magazine especially in the 1860s, she wrote monthly editorials and book reviews, regularly contributed fiction and poetry to the magazines, and published the work of such writers as Edgar Allan Poe, Harriet Beecher Stowe, Oliver Wendell Holmes, and Lydia Sigourney. Hale and her magazine were "the arbiter of the parlor, the textbook of the kitchen —— the last word of authority in every home."

In the anti-professional climate of magazine publishing world in the 1820s, Hale condemned many magazine editors for relying on pirated material, declaring candidly that her "periodical is not a compilation, [...]. The work is to be wholly original articles." But in spite of her condemnation of the so-called "scissors editors," Hale herself was what might be called a "scissors autobiographer." Her sketches "memorialize" the events of her literary life, and repeatedly tell the story of how she was involved in the public sphere of print culture.

In antebellum America, Hale advocated her domestic ideology based on the philosophies of the republican Enlightenment and the ideas of Victorian gendered morality. She has long been considered as a conservative who formented a sentimental culture predominantly of white middle-class women, and as an "anti-feminist" who promoted the "separate spheres" ideology which called for women's retreat into the private home. I believe, however, that Hale's domesticity was a discourse that could justify women's public presence, against the

predominant doctrine of the "woman's sphere": the domestic discourse that a woman could be a "citizeness" in the civil society. How does the domestic ideology function in her autobiographic sketches, then? These texts carefully create the self-image of Sarah Josepha Hale, a Godey's "venerable authoress and editoress." This image is of a respectable woman, performing privacy even as she is undertaking public work; she appears pious and moralistically submissive while enacting public agency. This paper, therefore, explores the ways in which she strategically negotiated the domestic discourse in her sketches, and provided her young readers with a template for the discursive construction of a private woman in public.

In her autobiographic sketches, Hale tells only about her literary history: (1) her mother's influence on Hale's reading habits, (2) a formative reading experience in her childhood, (3) academic tutelage of her brother and her husband, (4) widowhood with five fatherless children, and (5) her decision to accept the editorship to support and educate her children. Through the domestic discourse in her sketches, Hale scrupulously produced her public image that embodied the magazine's unchanging ideal of womanhood. She thus attempted to provide a vocabulary of how women could achieve a public presence without being too controversial in nineteenth-century America. She hoped that there would be more female citizens who would be responsible for and contribute to the moral development of civil society, as herself who featured on the pages of her own autobiographic texts.